

井上文則著

『軍人皇帝時代の研究——ローマ帝国の変容』

足立広明

ローマ皇帝ウァレリアヌスを捕らえたササン朝ペルシアの皇帝シャプール一世。世界史の教科書や参考書などで、このような解説付きの写真を見た記憶のある人は少なくないだろう。三世紀に入るとローマ帝国は内憂外患、果てしのない混乱の時代を迎え、二六〇年のウァレリアヌス捕囚はその最底辺を象徴する事件としてよく知られている。

だが、本書の井上文則氏にしたがえば、この最底辺の時代の皇帝ウァレリアヌスこそがその後のローマ帝国の復興につながる改革を始めた立役者なのである。具体的にはそれは機動軍の創出であり、機動軍の活躍を通じて騎士身分の軍人が元老院議員に代わって帝国の統治を担うようになり、帝国の政治構造自体が大きく変容していくのだと説明される。本書は「危機の時代」とされる三世紀の軍人皇帝時代に関する初めての本格的な研究であり、とくにその後半、一連の「イリュリア人」皇帝たちの活躍で帝国がそれまでとは異なってきたかたちで再建されていくさまをコンスタンティヌス帝の登場まで活写するものである。

古典古代の市民精神（あるいは市民共同体の結集の原理でもよいのだが）が解体していく結果として三世紀の「危機」が訪れるのなら、どうしてローマ帝国はそのまま滅び去ってしまったわかないで、再びよみがえってくるのであろうか。また、よみがえったローマ帝国は、それまでどのように質的に変化していたのだろうか。

本書は断片的史料と部分的解釈にとどまる先行研究を著者自身の問題意識によってつなぎ合わせ、これまで暗い谷間の時代のように等閑視されてきた三世紀の軍人皇帝時代に対する全体像を描き出し、この問いに答えてくれる。国内はもちろん、海外を見渡しても類書は存在せず、その意義は大変高いものとして評価されよう。本書に関しては合評会が開催され（二〇〇九年五月一日、於京都大学）、関西圏を中心に西洋古代史研究者の高い関心を集めた。いささか時宜を失った形になってしまったが、その際発題を行った評者の視点から本書を紹介し、またその学問的位置づけを考えてみたい。

本書は全体で七章構成となっているが、その前に序章が置かれ、ここで騎士身分の興隆から当該時代の再考を進めようとする、著者の問題意識と本書の射程が明確に述べられている。起点となるのは南川高志氏の提唱した「皇帝と元老院の共同統治体制」であるが、新しく興隆する騎士身分に関しては同氏の言う「専門家」概念では説明に不十分であり、「アマチュア」として政治闘争に敗れたはずの元老院議員身分がコンスタンティヌス帝時代に復活することが説明できないとして（二頁）独自に騎士身分の実体を検証しつつ、コンスタンティヌス帝時代まで筆を進めることが宣言されるのである。

また、序章では軍人皇帝時代にとどまらず、その前後の「元首政」と「専制君主政」を視野に入れた幅広い問題提起が展開されている。とくに新しい古代末期研究の進展による政治史的関心の希薄化も研究停滞の一因であると指摘している点は注目に値する。「専制君主政」概念が批判される一方、社会史や心性史に由来する「古代末期」概念では政治史に由来する「元首政」概念と接合できないため、「元首政から専制君主政へ」という問題意識が維持できなくなったというのである（一〇頁）。

古代末期研究の隆盛のために軍人皇帝時代の研究が停滞したかどうかは、評者としては結論を留保しておきたいところであるが、元首政からどこへ帝国が向かっていくのか、その方向が見定めにくい学界状況にあることは確かであろう。そのなかで現時点でも残る「元首政から」の視点に立って、続く時代に一定の見通しを与えようとする著者の姿勢は多くの研究者にとって有益な道しるべとなりうるものである。

次に本論部分に移るが、本書は二部から成り、それぞれ独立の論文もしくは口頭発表であったものを内容の共通性によってまとめている。第Ⅰ部は「騎士身分の興隆」、第Ⅱ部は「イリュリア人のローマ皇帝」である。まず第Ⅰ部に関してであるが、順に「ガリエヌス帝勅令をめぐって」、「プロテクトルの変遷」、「機動軍の形成」、「パルミラの支配者オダエナトウスの経歴」の四章から成る。第四章のパルミラに関する章はそれ以外のものといささか毛色が異なるが、最初の三章は序章で宣言された目的に沿いつつ、章立ての通りに一貫した内容をもつて叙述されている。

第一章「ガリエヌス帝勅令をめぐって」は最も長く、本書全体

の要の役割を果たしている、やや立ち入って紹介してみよう。内容は同勅令に関する四世紀の史家アウレリウス・ウィクトルの記述をめぐる論争の紹介から始まり、アウレリアヌス時代の機動軍創出まで論ずるものである。ガリエヌス帝が元老院から軍務を剝奪する勅令を発したとするウィクトルの記述は、これ以降も複数軍団を擁するコンスル格元老院属州の総督に元老院議員が就任していることを示す碑文史料と矛盾する。著者はこの矛盾についての論争を検討し（第一節）、ウィクトルによる創作の可能性が高いことを示唆するのだが（第二節）、単なる事実確認で終わらせず、ガリエヌスに先行する騎士身分の実体解明にまで筆を進める。すなわち、騎士身分の総督や軍団長官の出現はガリエヌス帝に先行するウァレリアヌス帝時代に起こった可能性が高いこと（第三、四節）、その際社会的上昇を果たした騎士とは軍人であり、三世紀前半にプロクテトルなどの財務官職を足がかりにしていた騎士とは明らかに相違していることが指摘される（第五節）。そして、最後の第六節で軍人騎士身分の台頭が起こった理由を軍事関係の称号、プロテクトルの変遷を中心に考察している。

すなわち、特定の軍団の百人隊長にのみこの称号が与えられていることから、著者はM・クリストルに拠りつつ、これを皇帝による機動軍の創出と関連づけて捉え、一方クリストルが機動軍創出をガリエヌス勅令と関連づけて考えるのに対して、それまでの論証からこれをウァレリアヌス帝期とするのが適当と推論している（六一頁）。さらにその背景として著者は同帝のつた帝國防衛分担政策を挙げる。息子ガリエヌスが西方を、自身は東方を分担し、ガリエヌスがさらにその息子たちと西方を分け合うという

体制について、これを「ディオクレティアヌス帝が敷いたテトラキア体制を先取りする画的なもの」と高く評価している（六二頁）。そして、この防衛分担政策で皇帝と軍は恒常的に接するようになり、元老院議員に代わって軍人が皇帝の側近集団となり、ひいては統治階層の変化に結びついたのだという（六三頁）。冒頭に記したようにウァレリアヌス帝は見事に名誉回復されたわけである。教科書などの解説とは一八〇度異なった視点がここに提示されたといえよう。序章の問いにはほぼこれで解答が与えられた恰好となるが、続く第二章、第三章で第一章を受ける形で、それぞれプロテクトルと機動軍についてさらに実証的な検討が加えられる。

第二章「プロテクトルの変遷」では前章後半で触れられたプロテクトル称号をめぐる詳細な史料の検討が展開される。ガリエヌス、ウァレリアヌス期に与えられたプロテクトル称号と四世紀の官職としてのプロテクトル、それに先行して存在したカラカラ帝時代など三世紀前半の官職プロテクトルの相互関係が検証される。四世紀の官職プロテクトルが将官級官職への登竜門であったのに対し、三世紀のそれは護衛兵など、下士官クラスにとどまっていた。転機が訪れるのは三世紀半ばであり、このとき騎士身分にも属州総督や軍団司令官職が解放され、皇帝の側近、機動軍の将校に官職ではなく、称号としてのプロテクトルが与えられた。その後なんらかの変革を受けてプロテクトル職は四世紀の「幹部候補生学校」的な役割に転じていったというものである。史料状況が乏しいために、推測にとどまる部分が非常に大きいように感じられるが、可能性の高い議論であらう。

第三章「機動軍の形成」は、これまでの章で前提とされてきた機動軍の創出について具体的な史料検証を行うものである。副題として「ガリエヌス帝の「騎兵軍改革」について」とあるが、本章末尾にもあるように、内容としてはウァレリアヌスにはじまり、ガリエヌスが継承した改革の分析である。著者はここでA・アルフェルデイの提唱以来通説化していたガリエヌスによる中央騎兵軍創設について、歴史家ゾナラスの記述の分析から異を唱え、ガリエヌスの改革はアルフェルデイに先行してリッターリンクの提唱していた個別の騎兵部隊の創出にあったという説に回帰する（一〇四―一五頁など）。重要なのは、ほかの章でもそうであるように、著者がここで単なる史料検証と事実認定で議論を終わらせず、さらに大きな歴史の推移のなかに事態を置いて解釈を進めている点である。著者によれば、多くの研究者が騎兵の華々しさを奪われているが、実は地味だがこれに先行する歩兵の分遣隊が帝国の政情不安のなかで常備軍化していくことに機動軍の始まりがあり、この歩兵の分遣隊に騎兵が組み合わされて臨機応変に危機に対処できる機動軍が編成されていったのだという（一〇六一―一七頁）。

第四章「バルミラの支配者オダエナトゥスの経歴」は、ローマ史の文脈のなかにバルミラがどう位置づけられるかという試みで、それ自体で興味のある論点が多く展開されているのだが、ここでは本書全体との関係から次の点を確認するにとどめたい。すなわち、ここでも著者はウァレリアヌスの積極的な政策的意図を見出そうとしていることである。バルミラ語碑文とギリシア語記述史料との突合せから浮かび上がるオダエナトゥスへのシリア・フォ

エニキア総督任用は、第一章でも言及されたウアレリアヌスの帝国防衛分担政策の一環であり（一一八頁）、その後ガリエヌスによってペルシアに面したローマ帝国東方諸属州全体の軍事指揮権を与えられたというのである（一二九頁）。以上が第一部である。

続いて、第五章から七章までが第二部「イリュリア人のローマ帝国」を構成する。第一部では三世紀半ば以降に興隆した騎士の実体は軍人であったことが確認されたが、その軍人とはバルカン半島のドナウ川流域の諸属州、本書で言う「イリュリア地方」の兵卒のことであった。そしてこの兵卒上がりの皇帝たちの下で軍事的危機は次第に克服され、後期ローマ帝国体制の確立に至るのである。第二部では、序章での予告どおり、この「イリュリア人皇帝の時代」をコンスタンティヌスの帝国統一によるその終幕まで追っている。

第五章「イリュリア人皇帝支配下のローマ帝国」では、まず第一節でガリエヌス暗殺後のクラウディオスの即位の二六八年からディオクレティアヌス帝の即位の二八四年まで皇帝の率いていた機動軍が解散することなく継承された可能性が高いことを史料的に検証する。第二節では皇帝と機動軍、軍司令官と機動軍、それに属州総督と機動軍の関係がプロソボグラフィの手法を用いて検証され、いずれの場合においても機動軍出身者の就任率が高いことが証明されるのである。

同章第三節は趣を異にした独立した内容を持ち、騎士台頭のこの時代に元老院が政治的どのような状態であったかを検証する。その結果は大変興味深いもので、皇帝が配下の機動軍とともに国境に張り付くようになる、首都の元老院議員は皇帝不在でかえ

って羽を伸ばしたということなのか、イタリアやアフリカ属州ではこれまで以上の影響力と威信を享受した（一五四頁）というのである。そして、彼らは随行員となったり、使節団を派遣したりして皇帝との関係を保っていたという。

全体としての騎士階層興隆の風潮のなかで、意外なことに元老院も息をふき返していたという事態を念頭において見ると、これまでとちがって非常にすつきりと理解できる事柄が同時代に生じる。それが第六章であつかう「タキトウス帝即位の謎」である。タキトウス帝については、アウレリアヌス帝暗殺後、機動軍が自ら皇帝を選出でずに元老院に皇帝選出を願った結果、老齢の最後の元老院議員皇帝として立ったとされてきた。著者は史料検証の結果サイム説に分を認め、彼は本来は軍人で老齢になってから名譽職として元老院議員となった可能性が高いとする（一七一頁）。しかし、その選出を機動軍が元老院に願ったのも事実であり、それに応える権威と影響力を前節のように元老院が回復していたと見るのである（一七六―一七頁）。このような関係がやがて四世紀の後期ローマ帝国体制においてどのように結実するのか、本書ではあくまで示唆にとどまるのだが、大変説得力のある新しい見解であるように思われる。

第七章「軍人皇帝時代以後の「イリュリア人」」では、イリュリア人のその後の命運と、逆に時代をさかのぼって彼らの形成過程が一瞥される。イリュリア人はディオクレティアヌス帝期においては依然として属州総督や軍司令官などで優勢であった（第一節）のだが、同帝退位後没落が始まる。それは、テトラルキア体制下の各分担地域のそれぞれで勝手に皇帝が立ち始めると相互の

人的交流が閉ざされて機動軍がローカル化し、機動軍内に占めるイリュリア人の割合がドナウ流域以外では低下していったと考えられるからである（第二節一八九頁）。決定的となったのは、このドナウ流域を保持していたリキニウスがゲルマン人などを主力とするガリアのコンスタンティヌスに敗れたことであった（同節一九三頁）。しかし、それまで長く帝国をつなぎとめる力として作用してきたイリュリア人を放逐したのであるから、コンスタンティヌスはそれに代わる支持基盤を探さねばならなかった。このときコンスタンティヌスが目を付けたのが伝統的支配階層である都市参事会員層であり、彼らを昇格させて新たに元老院を拡充していったのだと著者は考えている（第三節）。

第四節はそれまでとは独立して元首政時代にさかのぼってイリュリア人の形成過程を追うものである。ここではじめて「イリュリア人」とは何者であるかの定義が述べられる。それは人種や言語によるものでなく、ドナウ流域の諸属州の住民ということであったが、徴税区として一体であり、属州となつてから軍人皇帝時代までの二〇〇年間の歴史のなかで形成されたものだという（一九八・九頁）。その形成は三段階を経たもので、最初にハドリアヌス帝以後の軍団兵現地徴募に由来する軍隊社会の形成、次にマルクス・アウレリウス帝時代のマルコマンニ戦争時代における、侵入する「蛮族」に対する「ローマ人」意識と一体感の醸成、最後にセウエルス帝に従軍しての帝国中央への進出である（二〇〇頁）。帝国中央に登場したイリュリア人は強い郷土意識と結束力を誇っていたが、これがやがて帝国意識と融合し、帝国の安定と統一に貢献していくのだという（二〇二―二〇五頁）。

終章「イリュリア人の興亡とローマ帝国の変容」は再度本書全体を振り返り、第一部も含めてそれは事実上「イリュリア人の興亡の跡を辿るものであった」（二一五頁）とまとめられている。

そして、再度ウアレリアヌスの帝国防衛分担政策と、ガリエヌスとともに行った機動軍創出の歴史的意義が確認されるときにも、新たにその行き着いた先としてクラウディウスの即位が「ローマ帝国の変容の総決算」として位置づけられている。結論として著者は軍人皇帝時代は単なる「過渡期」ではなく、ローマ帝国が「統治構造と統治階層の決定的な変貌を」遂げた時代としている。さて、ここまで内容を紹介してきたが、評者としてはまだ本書の意義を伝えるには不十分であると感じている。明快な視点で貫かれ、読みやすい文章で書かれているものの、いざ紹介するとなると、たちまち困難にぶつかってしまう。本書を正しく評価するには、その実証的研究の性格上、著者の用いた史料や先行研究を今一度細部にわたって検証する必要がある。また個別の論点についてもウアレリアヌス帝統治の見直しのような本書の趣旨にかかわる議論はもちろん、元老院がこの時期影響力を回復させていた可能性の示唆など、ローマ史全体を考える上でも見過ごすことのできない大胆な展望が、慎重な推論の上に立ちつつも、矢継ぎ早に述べられる。これらの諸点の全てにわたって簡潔、適切に触れることは簡単ではない。著者の独特の筆致を直接は伝えられないのも残念である。

だが、いずれにせよ、冒頭にも記したとおり本書のような問題意識に貫かれた軍人皇帝時代の本格的な研究書は海外を見渡しても存在せず、学問的に高い価値を有することは間違いないところ

である。また、一般読者の潜在的な要求にも応えるものであろう。三世紀後半以降連続するイリュリア人皇帝たちによる連戦連勝ぶりには、ギボンの翻訳などを紐解いた一般読者にも馴染みのあるはずだが、その歴史的背景を知りたいと思つても、これに応える研究書が存在しなかった。その点でも本書は有益である。

いくつか疑問も述べておこう。ひととき目立つのは「騎士身分の興隆」で始まったものが、最後は「イリュリア人の興亡」で終わっていることである。たとえて言えば「下克上と戦国大名」で始まった叙述が終わつてみると「尾張・三河の武士団」になつていたようなものであろうか。指し示す対象が同じでも、それを捉える概念がまったく異なっている。先行研究の騎士身分概念が不十分であるとして、その実体を説明すると宣言して出発した以上、最後までその概念の明確化で終わらないと、一貫性に欠けるのではないか。もつとも、これは論文集という性格を考慮せねばならず、収録論文の相互関連性の薄い、雑多な内容の論文集も多いだけに、立論のレベルが最初と最後で異なつていたとしても、三世紀のローマ帝国をイリュリア地方出身の軍人皇帝の動向から見直そうとしている視点に貫かれていることのほうを評価すべきなのかもしれない。書き下ろしの序論と終章で補うことはできなかったのだろうか。

また、ほんとうに騎士身分の実体は明らかになつたのであろうか。本書合評会で会場からも出た質問であるが、本書で言う「軍人」とはどのような人々を指すのだろうか。ドナウ地域には帝国の三分の二の兵力が集中していたというのがそれはどのような人々で、どのように編成されていたのだろうか。「イリュリア人」に

ついても同様で、本書の最終章最終節に至つてごく簡潔に約二〇〇年間の「歴史形成物」であると述べられるが、これだけではその「実体」は曖昧模糊としてよくわからない。また、彼らがマルコマンニ戦争で「蛮族」に対する「ローマ人」意識を共有するようになったという学説も、現在検証の上維持可能なものなのだろうか。

仮に「イリュリア人」がそのように「ローマ人」意識を強く持つていたとして、彼らの中央への進出がセウエルス朝に始まつていたとするなら、本書であつかうウァレリアヌス期よりかなり早い。この間の軍人もしくはイリュリア人皇帝、たとえばマクシミヌス・トラクスなどはどのように評価されるのだろうか。まったくネガティブな評価ばかりのようであるが、評価を下す史料の性格の問題もあろうし、彼が元老院の反対にもかかわらず、軍を率いて外敵と戦い、ローマ皇帝であろうとし続けたことのほうに評者などは関心が向いてしまう。それは後のイリュリア人皇帝を彷彿させるようにも思えるのだが、違うのだろうか。逆に帝國統一に向かい始めた時代でも、それほど結束力が強いのなら、どうして相互に暗殺などをし合つたのか。コンスタンティヌスが自身イリュリア人出身なのにこれに敵対したことの説明に彼自身の人質体験を挙げているが(二〇七頁)、これも結束力が強いのならそもそも人質を取る必要もないわけで、宗教の別による説明同様あまり説得力がないように思える。

綿密な史料・学説検討の結果である第一部にも素朴な疑問は残る。全体を通してウァレリアヌス帝の政策意図が強調されているようなのだが、帝國防衛分担政策にせよ、機動軍の創出にせよ、

状況に押されてのものではなかったのか。とくにオダエナトウスへの東方軍司令官もしくは総督称号の付与は実効支配を失った地域への名譽称号授売りのようにも見え、これを息子ガリエヌスに実効支配中の帝国西方を委ねた防衛分担政策と同様にあつかうのはいささか強引なように思えた。

それから、アルフェルデイの中央軍創出説は誤りで、アウレオルスなどは一時的、臨時に皇帝麾下の機動軍の全権を委ねられたのみというが、すると一〇七頁などで皇帝の直属の「軍」は「解散可能な、一時的、場当たり的に編成されたものでなく、恒常的性情を帯び」ていたという「軍」とは何なのだろうか。同頁次段落でも「機動軍のうち最大規模を誇ったのは当然皇帝麾下の機動軍であった」と説明されている。第Ⅱ部になるが、第五章第一節で「機動軍の継承」としてこの皇帝麾下の最大の機動軍がガリエヌス暗殺直後からディオクレティアヌス即位まで解散なしに継続していることが確認されているが、これなども「中央騎兵軍」のように見えるし、そのような名称を与えても間違いないように

思えるが、何か別個の論理によってこのような叙述になっているのだろうか。

ほかにもまだ考え出すといくらでも疑問は湧いてくる。ただ、これは本書の価値を決して下げるものではない。むしろ冒頭にも記したように、断片的な史料をつなぎあわせ、これだけ明確な軍人皇帝時代像を提示してもらったことのほうを讀者は喜ぶべきなのであろう。ある程度疑問や矛盾点が生じることは百も承知の上での執筆であったと思われる。

最後に、「古代末期」を標榜し続けている評者からすると、海外における隆盛とは裏腹に、「古代末期」や「後期ローマ帝国」に関するモノグラフがないなかで、先に「元首政から」次の時代である「軍人皇帝時代」のモノグラフが出たことにわが国独自の学界状況を見る思いがした。次の時代が明確に見えるようになるよう努力したい。

(A5判 頁: + 二二六頁 二〇〇八年一月)

岩波書店 税別六九〇〇円)

(奈良大学准教授)